

生徒の潜在能力を引き出し、育てる 中学校教師の力量

筑波大学附属中学校教諭

肥沼則明

られる。そこで、本稿では「教師力」を次のように解釈し、話を進めたいと思う。

〈教師力〉 Ⅱ 生徒が自ら伸びようとする力を引き出し、育てる教師の力量

ただ、私は教師力を学術的に研究している研究者ではなく、まして教師力に優れた教師でもない。教師力を包括的に語ることはできない。そこで、自分がこれまでに出会った教師力に優れていると考えられる先輩教師について記述し、自分もそうなりたくて努力してきた過程を述べたいと思う。

なお、先述のように、教師力を議論する場合は教育活動全般を指すことが多いようであるので、ここではそれを学級担任と教科担任という二つの視点から考えていきたい。

2 学級担任としての教師力

(1) 生徒をその気にさせる学級担任

最初に、ほとんどの教師に共通する仕事として就く機会が多い、学級担任としての教師力について考えることにする。学級担任は、自分が受けもつ学級の個々の生徒の生活や学習状況の把握と指導に責任をもってあたることとはもちろんのこと、いじめの問題や人間関係のトラブルなどを未然に防いだり解決したりという、集団としての学級をスムーズに機

★「教師力」を「生徒が自ら伸びようとする力を引き出し、育てる教師の力量」と解釈し、学級担任としての教師力と教科担任としての教師力を考える。

★学級担任としての教師力は、①個々の生徒が本来もっている自ら伸びようとする力を上手に引き出し、学級という集団内でそれを生かしてあげる力、②生徒たちが行っていることを辛抱強く見守り、その過程と成果を認めてほめてあげる力、である。

★教科担任としての教師力は、その教科において各生徒を真剣かつ粘り強く指導して、その生徒がもつ力を最大限に伸ばすことができる力である。

★「教師力を磨く」とは、教科の専門性や教師としての資質を高めることに加えて、生徒から全幅の信頼を得ることができる「人間力」を磨くことである。

1 「教師力」とは何か？

「教師力を磨く」というテーマで本稿の執筆を依頼された当初、私は少し困惑していた。それは、「教師力」とは何かが定義されていなかったからである。もともと、「教師力」に対する自分なりのイメージがまったくなかったわけではない。それは、自分の教師としてのライフワークが「『授業の名人』と呼ば

れる教師の秘密を明らかにすること」であるからである。ここでいう「授業の名人」とは、

英語の授業の場合、①授業の展開が明快かつ論理的である、②目を輝かせて授業に参加する生徒を育てている、③英語の運用力の高い生徒を育てている、という条件を満たしている教師を指す(肥沼、二〇〇一)。一方、「教師力」とは、一般的には以上のような教科指導における力量に加えて、より広く教育活動全般における教師の力量を指していると考え

能させる重要な役割を担っている。そこで、ある先輩教師の指導を例にとつて、学級担任としての優れた教師力とは何かを考えてみたい。その先輩教師とは、前任校で同僚であった前埼玉大学教育学部附属中学校美術科教諭・山田晋治先生（現埼玉県教育局市町村支援部義務教育指導課指導主事）である。

山田先生と最初に担任団を組んだのは、私が二七歳で山田先生が二九歳のときであった。二〇代の教師といえ、まだ若手で経験が浅いと一般的には考えられている段階であるが、山田先生はすでにベテラン教師に劣らない学級経営の手腕をもっていた。とにかく山田先生の学級になると、不思議と生徒はみなやる気にあふれてしまうのである。特にそれは行事で顕著に表れ、合唱コンクールや演劇コンクールでは常に優勝、体育祭でも団体競技である応援合戦では優勝してしまうのである。つまり、個々の生徒のもつやる気や集団としての生徒の団結力を引き出し伸ばす力に長けていた先生なのである。このような描写をすると、山田先生が生徒を強力な力で引っ張る、いわゆる熱血教師であるかのような印象を与えるかもしれないが、私の印象としてはほぼ正反対であり、どちらかというところから老獪さが漂うような先生であつた。あえて例えて言うならば、人気マンガ

「総務部総務課 山口六平太」（小学館）の六平太のような先生であつた。

(2) 「生徒を育てる」という発想

では、山田先生はどうしてそのような学級集団づくりができたのであろうか？それを語るには私は自分が適任者の一人であると考えている。その理由は、私が高校教師から中学校教師に転身した身であつたからである。

前任校に着任した当時、私以外の同僚はみな公立中学校で勤務した経験があり、私が唯一の高校からの転任者であつた。前々任校の高校は埼玉県内でも「五本の指に入る」（？）と言われるほどのいわゆる教育困難校だったので、高校とはいえ中学校並みかそれ以上の生徒指導の困難さをくぐり抜けてきた自信があつた。しかし、中学校に赴任して学級担任をもつと、なぜか自分の学級の生徒がうまく育たない。むしろ、山田先生の学級の生徒とはかなり差があつた。

後に気づいたことであるが、それはそもそも高校教師であつた私には「生徒を育てる」という発想がなかつたことが大きな原因の一つであつた。高校生はすでにある程度自分のことは自分でできるようになっており、集団で行う行事なども生徒任せにしておいても何とかなつてしまう。ところが、中学生は入学したときから手取り足取り教えてあげなければ

ばならない。さらに言えば、入学時からどのような細かい指導を行ってきたかが、自我が芽生えて精神的に親や教師の束縛から独立しかかる二年生、自分の進路に不安を抱きつつも自立心が確立し始める三年生、の学級経営に大きく影響するのである。つまり、一年次にどのような「仕込み」ができるかで、その後の生徒の発達の方向が決まるのである。

(3) 優れた教師力をもつ先輩の実践例

山田先生は、この点について大変優れた指導力をもつていた。ここではその中で特に印象に残っている二つのことを記したいと思ふ。

一つ目は、新入生が入学してから三日目くらいのできごとである。その日の朝、山田先生が担任する一年D組の生徒数名が玄関の外の掃除をしていたのである。しかも、「なんでそんなことをしているの？」という私の問いかけに対して、その生徒たちはただにっこりほほえんで黙々と掃除をしていた。翌日の朝はまた別の生徒が数名掃除をしており、そんなことが一週間ばかり続いたのである。

後に山田先生にこのことを尋ねると、生徒に入学直後の学級活動で以下のような投げかけをしたそうである。

◇新入生は上級生や先生方に大切にされるのが当たり前になつているが、新入生こそ学

校への感謝の気持ちを表すべきではないか。◇感謝の気持ちを表す具体的な方法を自分たちで考えて実行してみようか。

すると、生徒たちは自分たちで玄関前の掃除をしようか決め、当番を決めて実行したとのことであった。これは、「自分たちで考えて決めたことを自分たちの意志で行う」ことが、生徒を真剣に取り組ませる方法として大切であるということとを学んだできごとであった。さらに、山田先生は生徒に「先生方や仲間」に「なぜやっているの?」と尋ねられたら、黙って笑っていないさい」と言っておいたそうである。その理由は聞き忘れたが、おそらくそれは、「学校のために自分たちができるところをやっています」と公言してしまうことで、生徒が内なる動機から行っているという意識を壊してしまうことを防ぐための仕掛けだったのではないかと思う。

もう一つは、学級日誌のことである。学級日誌は毎日週番が書くことになっていたが、山田先生の学級の日誌は全ページが芸術品のようであった。日誌にはその日の出来事を自由に書く欄があったが、山田先生は必ずそこに生徒によって書かれた記述以上の感想や返答をカラフルなペンで書いていた。すると面白いもので、生徒は段々とそこにたくさん書くようになり、行間に線を引いて二

倍書けるようにして書く生徒が出てきたと思つたら、次は欄外まで使う生徒が始め、ついにはそのページ全体に自由記述が広がっていき、「今日は七〇行書きました!」「一二〇行書いたぞ! 新記録達成!」などという言葉が踊るようになっていた。

以上の山田先生の実践から学級担任として学べることは何であろうか? それはまず第一に、個々の生徒が本来持っている自ら伸びようとする力を上手に引き出してやることではないかと思う。そして、それを学級という集団で生きるようにすることである。ただしそのためには、生徒が納得して行動できるきっかけを、担任が提供してあげることが必要となってくる。それは、新しい環境で何ができるかの例を示すことで生徒がやる気を起こすからである。第二に、生徒が行っていることを辛抱強く見守り、その過程と成果を認め、はめてあげることだと思ふ。それによって生徒は自分に自信をもち、さらに次の行動への意欲をもつのである。一方、これらのことに無頓着な担任の学級では、生徒が個人としても集団としてもやすき・低きに流れ、結果として諸々の問題を引き起こしやすくなる傾向が見られる。したがって、個々の生徒が集団の中で自分が役に立つ存在であると実感できるように、学級担任が先手を打って行動し、

地道に指導していくことが大切であると思う。

3 教科担任としての教師力

(1) 人間関係づくりに貢献する英語科教師

次に、教科担任としての教師力を、自分が担当する英語科の立場から考えてみたい。英語科教師には大きくいうと二つの役割がある。一つは外国語という言語を習得させる、つまり生徒に技能や教養を身につけてあげることである。そしてもう一つは、コミュニケーションを重視した指導の中で、他とのかかわり方、つまり人間関係をスムーズかつ良好なものにすることを教えることである。特に後者に関していうと、とかく人間関係づくりが下手になったといわれる昨今の生徒たちを指導するうえで、英語科教師は重要な役割を担っていると自負している。そこで、ここでは英語科教師として優れた教師力をもっているとされる先輩の実践を紹介することにしよう。その先輩とは、現任校の同僚である筑波大学附属中学校教諭・蒔田守先生である。

蒔田先生といえば、その授業を見た教師はだれもが「体を切り売りしている」と評し、卒業生は「英語の授業を通して道徳の授業をしていた」と振り返る、「名人」中の名人である。たしかに、蒔田先生の授業を見るだけ

で指導内容や指導法の勉強になる。しかし、それだけでは見えない、その根底にある教育理念こそ蒔田先生の教師力の神髄である。

(2) 個人の力を限界まで引き出す個別指導

蒔田先生に關してもその優れた点を書き出したら、とてもではないが紙幅が足りない。そこで、ある指導場面を切り口にして蒔田先生の教師力の一端を述べることにする。

現任校の英語の授業では、生徒に発表をさせる機会がたくさんある。その場合、生徒の発表レベルを高く維持するためには、個々の事前指導をしっかりと行うことが欠かせない。ただ、個々の生徒を指導する際、自分を含む大抵の教師は、その生徒がもっている「値踏み」した力の八〇%くらいできていけばよしとして帰すのではないだろうか。ところが蒔田先生は、どんな生徒でもその生徒がもつ力を一〇〇%、いや一二〇%發揮できるレベルまで高めて帰すのである。

ある年の研究協議会の前日にこんなことがあった。公開授業では本校英語科が誇る「What Am I?」という活動が予定されており、クイズを出題する男女各一名が事前指導を受けにきた。ところが、そのうちの男子のほうはなかなかうまくできず、しまいに「ボクにはできません……」と言って泣き出してしまったのである。しかし、蒔田先生はあわてる

ことなくその生徒を辛抱強く指導し、最終的にはその生徒も自分の力が予想以上あることに驚いて、笑顔で帰っていたのである。そしてその生徒は授業で仲間の予想をも超える発表を行い、仲間から喝采を浴びた。その生徒はそれで自信をつけ、次の機会ではさらに上の発表をしようとがんばっていた。

(3) 生徒のことを真に思いやる指導

蒔田先生のこのような指導風景から見えてくる指導理念はどこから来るのであろうか？それは一言でいえば、「生徒を心から思いやる気持ち」である。

蒔田先生のそのような徹底した指導は、教師の積極的な指導をあまり好まない生徒には最初は重荷に感じられることもあるようだ。しかし、そのような生徒も、仲間が次々と蒔田先生の「魔法」にかかって力をつけていくのを見せつけられていくうちに、自分もそのようになりたいと思ってしまう。もちろん、蒔田先生の指導が単に生徒をいじめるためのものであれば生徒は反発するであろう。そうしたことが起こらないのは、蒔田先生の指導が真に自分のためを思ってやってくれているのだということ、生徒が敏感に感じ取っているからである。そして、この個々の生徒への地道な指導の連続が、結果として学級全体のレベルアップへもつながるのである。

「教師力を磨く」とは？

では、最後に「教師力を磨く」ということについて考えてみたい。

読者の方は、本稿で私が取り上げた二人の先生に共通点があることにすでに気づいているだろう。両先生の教師力を学級担任としての観点と教科担任としての観点で分けて述べたが、結局は両先生とも生徒から全幅の信頼を得ている教師であるということ。それは、山田先生が美術科教師としても超一流であること（生徒と一緒に山田先生の美術の授業を受けたとき、この先生に習えば自分も美術が得意になっただろうと思つたものである）、蒔田先生が学級担任としても他を圧倒する学級集団をつくる教師であることからわかる。

故に、両先生の優れた点をあらためて見直してみると、「教師力を磨く」とは、教科の専門性や教師としての資質を高めることもさることながら、それを支えるもつと深い部分、いわばそれは「人間力」とでも表現できる部分を磨くことではないかと思うのである。

参考資料 肥沼則明「名人」の授業に学ぶこと―各活動内容や指示の裏にある指導感を探る『英語教育』三月号、三〇・三三、大修館、二〇〇一年。